

# マレーシアの 子ども達をめぐって



藤長 かおる

はじめに

マレーシアは若い国である。英国の植民地支配、日本による占領時代を経て一九五七年に独立してから四十年にもならない。しかし、現在は、マハティール首相の主導の下にアセアン諸国の中でも発言力のある国となった。その経済発展にはめざましいものがあるが、マレー人、中国人、インド人を始めとして、独自の宗教と言語と生活様式を持ったいろいろな民族によって構成される多民族社会故の困

難さを持つ。「マレーシアの子ども達」といっても、どの民族に属するか、どの社会階層に属するかによって異なっており、その共通項を見い出すのは難しい。

筆者自身は、一九八八年から三年間、仕事でクアラルンプールに滞在し、そこで次代のマレーシアを担う若いマレー人の学生達に日本語を教える機会を得た。真面目で敬虔、国家建設に瞳を輝かせる十八、十九歳の彼らに接するなかで、考えさせられる

ことの多い日々だった。私が触れ合うことの多かった彼らがどんなところでどんな子ども時代を送ったのか、それと共にマレーシアの子ども達をとりまく状況についていくらかでも伝えることができたらと思う。

### コーランと子ども達

マレーシアの朝はとて早い。それは、また外が暗いうちに、モスクでの祈りの時間を告げる美しいアザンの響きで始まる。テレビの放送終了を告げるのもコーラン、イスラム教が国教（ただし信仰の自由は保障されている）のこの国では、毎日の生活とコーランは切っても切り離せない。金曜日はアッラーにモスクで祈りを捧げる特別な日、バジュ・マリュに身を包み腰にサロンを巻いた小さな男の子達も父親に手を引かれて、モスクへ向かう。マレー人の子ども達にとって、大人になっていくことは、イスラム教の世界観を身につけていくことだといって

も過言ではあるまい。子ども達は、お祈りをする両親の姿を日常的なものとして育つが、六歳頃になると、イスラム教の教義やコーランについて正式に勉強するために、放課後にコーラン塾に通うようになる。どうやって勉強するのかというと、アラビア語で書かれたコーランの読み方を勉強するのだという。意味はわかるのかと聞いたら、それは読めるようになつてからの話で、初めは意味もよくわからぬままにコーランを何回も読み暗唱していくのだそうだ。「暑い日の午後などついうとうとしたくなるのが人情、そんな時は容赦なく先生の鞭が鳴る」というシーンが、マレーシアで人気の漫画家ラットの『カンボン・ボーイ』にユーモア一杯に描かれているが、マレー人の学生達が総じて忍耐強いのは、小さい時から訓練されたものなのであろう。

### カンボン・ボーイ、カンボン・ガール

カンボンとはマレーシア語で村という意味だが、

ふるさとと言った方が、その意味をよく伝えられるだろう。イスラムの断食明けのお祭りであるハリラヤ・プアサの休暇には、懐かしのカンボンに帰省する人で交通は大混雑となる。日本のお盆といっしょだ。筆者も機会があつて、近くには水田が広がり、ヤシの木陰にある小さなカンボンの家を訪れたことがある。高床式で、庭にはわとりが遊び、色鮮やかなバティックの洗濯物がはためいて、小さな子ども達が元氣よく遊んでいた。

前出のラットの漫画には、カンボンを舞台に成長していく子どもの姿が、筆者の体験を基にして生き生きと描かれている。木の枝から池に飛び込んだり、魚を取ったり、遊びの場は豊かである。現代では、テレビがあるのが当たり前になり、子ども向けの番組も放映されている。また、マレー語に訳された『ドラえもん』の漫画本が大変な人気だとも聞く。経済の発展と共にカンボンの生活も様変わりしてきているとはいえ、まだまだカンボン・ボーイの

時代は失われていないようだ。

マレーシアでは、日本に較べると兄弟が多く、五六人というのもそう珍しいことではない。弟や妹の面倒をみるのはお兄ちゃん、お姉ちゃんの役割のひとつだが、兄弟は近所の同年代の子ども達と共によき遊び相手である。男の子の遊びとしては、川遊び、魚つり、パチンコ等、女の子の遊びとしては日本でおままごとや人形遊びなどがあるそうだが、小さい頃は男の子、女の子ということなくいっしょに遊ぶことも多いらしい。その他の遊びとしては、コーラの瓶の蓋などを利用したおはしき、ビー玉遊び、あやとり、ゴムとび等、日本でも馴染みのあるものもある。「私は海辺で拾った貝を使って、大きい貝はお父さんとお母さん、小さい貝は赤ちゃんに見立てて、砂の上にお部屋を描いて遊んでいた」と、海辺の村ならではの遊びを紹介してくれた学生もいた。貝殻を使ってこんなふうにも遊べるのかと子どもの持つ創造性の豊かさに感心させられた。

カンボンにも、一年制の幼稚園のようなものがあり、小学校入学前にそこへ行く子どもも多いという。幼稚園では、絵を描いたり、唄を歌ったり、お遊戯をしたり、少し字を習ったり、これは日本とあまり変わらないのかもしれないが、残念なことに私はカンボンの幼稚園は見たことがないのであまり詳しいことはわからない。

## 家庭での躰け

マレー人の学生達は、大変行儀がよい。また、道徳心厚く、礼儀正しい。それは、イスラムの教えに基づくことが多いのであろうが、家庭での躰けもなかなか厳しいように思う。

小さい頃、両親にどういふことをよく言い聞かされたかと聞いてみたことがある。「人に会ったら必ず挨拶をすること」「人に何かしてもらったらありがとうと言うこと」「大人の人が足をのばしている時など、その足をまたいではいけないということ」

等の答がかえってきた。誠に簡単なことだが、挨拶を交わすこと、感謝の意を表すことを教えるのは、豊かな人間関係を紡いでいく基本であろう、そう思って、とても温かい気持ちになった。

さて、躰けに関連して学生から教えてもらったマレーシアの諺を少し紹介してみたい。

- ・ぐずぐず食べていると象が来る
- ・最後まで食べ終わらないとごんが泣く

これは、食事についての戒め。「象が本当に怖かった」という女子学生の言葉には笑ってしまったがお米を大切に行っているところに稲作文化が思われる。

- ・枕の上に座るとお尻が腫れる
- ・腹這いになって足をあげて肘をつく、お母さんが早死にする

「腹這いになって足をあげて肘をつく」とは、だらしないかっこうでくつろぐことを意味する。どちらも行儀の悪いことを戒めたものであるが、マレーシアでは寝転んでポテトチップをつまみながらテレビ

を見るときはとんでもないことになる。

・女の子が木に登ると、その木は実がなくな  
る。

これは、女の子は女の子らしくと教えるためのものか。

諺なんて大人のでっちあげと言ってしまえばそれ  
までだが、理屈抜きのこんな教え方も、案外心に  
残って、たまにはいいものだと思う。

### 働くお母さんの願い

今の若い日本の女性達に「結婚して子どもができ  
たら仕事をやめますか」と質問したら、「続けた  
い」と答える人が多いのではないだろうか。マレー  
シアでも働く女性の姿を多く目にする。昨日まで大  
きなお腹をしていた大学のスタッフが、しばらく休  
んだかと思うと、机に可愛い赤ちゃんの写真をおい  
て颯爽と仕事をしていたりする。中流以上の家庭に  
なれば、お手伝いさんを雇うことが比較的容易だか

ら、家のことをあまり心配せずに仕事に打ち込める  
のだろう。また、高等教育を受けた女性は、自分が  
受けた教育の成果を社会に還元しなければもった  
ないという一種の使命感みたいなものも持っている  
ようだ。

それでも、働くお母さんにとってまだ小さい自分  
の子どものことはいつも気になることには違いな  
い。筆者が聞いた範囲では、子どもの面倒をみても  
らうなら、集団保育の保育園に預けるよりは、両  
親、親戚などの身近な人にみてもらうか、誰か人を  
頼んで家に来てもらう方がいいという意見が多かつ  
た。理由はたくさんの子どもといっしょだときめ細  
かな対応が望めないからということらしい。また、  
血のつながりのある人の方がわがままも言えるし信  
頼がおけると考えるのだろう。自分で面倒がみられ  
なくても、できるだけ、身近なところに子どもをお  
きたいということの現れかもしれない。

## クアラルンプールの幼稚園から

首都クアラルンプールは大都会。近代的なビルが続々と建っていく様は、マレーシアの経済発展を物語っているかのようだ。クアラルンプールを歩いていると、いろいろな顔をした人に出会う。マレー人、中国人、インド人、そしてマレーシア語でオラン・プティ（白い人）と呼ばれる人達、仕事で来ている日本人も多い。言葉も多様だ。街を歩いていてもテレビやラジオをつけても、いろいろな言語が耳に飛びこんで来るし、いろいろな文字で書かれた看板を見ながら歩くのも楽しい。服装もしかり、食べ物もしかりである。しかし、その楽しさもそういう社会で育っていく子どもにとっては複雑な意味を持つ。

幼稚園にもいろいろな種類があって、どの幼稚園に行くかによって、内容も随分違うらしい。クアラルンプール滞在中に地元の幼稚園にお子さんを通わせたことのある日本人の方にお話を伺ってみた。



▲ クアラルンプールの風景  
マスジット・ジャメ（イスラム教寺院）と近代的なビル

筆者がお話を伺った家庭では、中国人の園長が経営し、先生は主に中国人とマレー人という幼稚園にお子さんを通わせたそうだ。園児は、日本人、マレー人、中国人、インド人、その他白人の子ども達で、幼稚園があるのが高級住宅地の中心であるせいか、比較的豊かな家庭の子弟が多かったという。幼稚園での言葉は英語で、子どもは初めは何もわからなかったらしいが案外ヘッチャラだったという。ただし、四、五歳（日本でいう年少組）になるとマレー語の授業が始まり、家でもマレー語の「あいいうえお」のようなものを唱えていたと話してくださいました。

現在、マレーシアの国語はマレー語、大きな通り沿いに「私達の言葉、マレーシア語を愛しましょう」というスローガンをよく目にした。複合民族国家のマレーシアでは、古くは、中国人学校、インド人学校、それに英国のミッション系のスクール等があり、そこでそれぞれの言語によってそれぞれの価

値観に基づいた教育がなされていた。マレー人の子弟のためには前出のコーラン塾のより伝統的なものとしてボンドックがあり、イスラム教育も含めて読み書きをも教える機関であった。その後マレー人の子弟のためにも、別に世俗的な教育機関としてのマレー語学校がつくられ、そちらへ通学する子どもも多くなる。そして独立以後、教育内容が整備統一され、それと同時に英語に代わってマレー語が国語として積極的に学校教育に導入されるようになる。現在の学校制度は六・三・二・二・三制で、公立の小学校は、マレー語学校（旧英語学校を含む）、中国語学校、インド系のタミル語学校に三分化され、小学校の六年間のみは、それぞれの言語を媒体とした教育が認められている（ただし、マレー語と英語は必修）。しかし、中学以降はマレー語媒体の教育に一本化され、下級中学校（三年）、上級中学校（二年）、及び二年間の予備教育課程を経て、大学へ進学するシステムになっており、高等教育でも英語に

代わってマレー語で授業が行われるようになってきた。

このような言語政策は国家の統一を目指す上では必須だが、現状はマレー語が操ればそれでこと足るほど簡単ではない。特に、非マレー人には複雑な問題を提起する。例えば教育熱心な中国系の両親であれば、民族の言葉としての中国語と生活のためのマレー語、そして国際語、エリートの言葉としての英語を習得することを子どもに求める。幼稚園の教育内容は比較的自由だが、しかし、こういうマレーシアの状況とは決して無縁ではありえない。そのため、幼稚園の頃から公文式のスキルトレーニングのようなことを積極的に行う幼稚園もあるそうだ。

現在、政府のマレー人優遇の経済政策によって、植民地支配によって創り出された農村に住むマレー人、エステートに住むインド人、町で商業を営む中国人といった住み分け型の複合社会構造が、大きく変わろうとしている。

他の民族との融和と共存、そして「マレーシア」という名の共通の国家意識を創り出すことは、この国が歩んできた歴史を思うと、簡単なことではない。しかしながら、来るべく新しい時代に向けて、それぞれの民族が異質なものに対する理解と尊敬の念を持ちながら、多様であるが故に豊かな社会を目指してマレーシアが歩んでいってほしいと願わずにはいられない。そしてそのマレーシアの次の時代を担うのは、他ならぬ子ども達である。

執筆にあたっては、国際交流基金派遣専門家としてマラヤ大学予備教育課程において日本語の教鞭をとられていた上野栄三氏、在マレーシア日本大使館前一等書記官の山下勝男氏、国際交流基金日本語国際センター海外日本語教師長期研修生のロスリナさん、ロスワティさん、ハスパリナさんに貴重なお話を伺った。記して謝意を表したい。

(国際交流基金日本語国際センター)